◆教会員の発言への応答として菊池先生から「バルブ事件」についてのお話がありました。
◆うふざと教会の牧師であり、平和市民連絡会共同代表の平良夏芽牧師は、非暴力による新基地建設阻止、違法な事前調査阻止行動を進めておられます。 7月21日(土)12時すぎ、辺野古の海で作業を止める行動の中、いであ(株)の作業員が海中で平良夏芽牧師の空気ボンベのバルブを閉め、平良牧師は窒息状態となり急浮上しました。
◆以下はこの事件に関する平良牧師の緊急声明です。

緊急声明「バルブ事件に関して」

2007年7月26日

うふざと教会牧師
平和市民連絡会共同代表　平良　夏芽

被害を訴えている平良夏芽です。多くの方々にご心配をいただいておりますが元気です。様々な情報が飛び交っておりますので、事実と、私の思いを公にしたいと思います。

ことは、7月21日(土)午後12時30分頃に起きました。順を追って説明します。パッシブ・ソナーという機材を海底に固定するための台座の杭の打ち直し作業が行われようとしていました。作業ダイバーたちがタンクを背負って海に入ったので、私もタンクを背負って潜りました。14 リットルのタンクに満タン(200)を確認し、バルブを全開にしてから半回転戻すという基本操作をして潜りました。

皆さんに知っていただきたいのは、作業ダイバーが作業を強行する時もお互いの安全確認がなされていたということです。この日もダイバーのリーダーは、海底で何度も何度も私の安否を問うてきました。私が押しつぶされるたびに、私の目の前にOKサインを出して確認して来たのです。私のタンクがはずれた時に背負い直す手伝いをしてくれたのもダイバーのリーダーであり、急浮上した私を介助してくれたのもダイバーのリーダーです。

それゆえにエアーが止まって急浮上した時、私はバルブが閉められたとは夢にも思いませんでした。船上にあがって落ち着いた私は、作業ダイバーが乗っている船に阻止船を近づけてもらって「助けてくれてありがとう。エアーがゼロになってしまったみたい」と告げているぐらいです。

ダイバーがそんなことするはずがないという思いと、海底でかなり息が荒れていたので

エアーの消費が激しかったのだと判断した私は、原因を確かめることもせずにお礼を言いに行ったのです。

しかし一緒にいた仲間たちから「バルブをさわっていたようだが閉められていないか」と確認され、改めて確認してみたらバルブが閉まっており、エアーの残量も 150 もあったのです。船上の仲間たちはもちろんバルブをさわっていません。状況として作業ダイバーがさわったとしか言えないというのがはっきりと言える事実です。更にこれを補完する資料として映像があります。前日に購入したばかりの防水ビデオカメラに現場の映像が映っていますが、じっくりと見ないと分かりにくい映像です。

現在、ブログ等で出回ってしまっているくっきり写っている写真は、バルブが閉められた瞬間のものではありません。確かにバルブに手が伸びており、半回転ほど回っているようですが、閉めたとも言えますが開いているのを確認したとも言える映像です。ですから、この部分の映像や写真を現場写真として使用することは止めてください。関係のないダイバーを巻き込むことになります。

もう一つ大切なことは、辺野古の闘いは「相手との関係性を大事にして来た」ということです。基地建設計画が白紙撤回されたとき、作業をしていた人たちと酒を飲めるような、そんな阻止行動を目指してきました。現実は厳しいもので、なかなかそのようにはいきませんが、目指していたのはそのような関係性です。バルブを閉めた本人は、その責任を負わなければなりません。しかし、必要以上にその個人を責めるのではなく、現場の作業員をそのような精神状態に追い込んでしまった権力にこそ、その矛先を向けて欲しいのです。

施設局は、これまで多くの怪我人を出してきました。気を失って救急搬送された仲間もいました。どんなに危険な状況が生じても、一切の責任を負わず、ノルマだけを業者に押しつけ続ける施設局こそが糾弾されるべきです。これが「防衛」という言葉を使っている人々の実態です。現在は現場に責任者もおかず、すべての責任を業者だけに負わせる体制をとっています。全国の皆様、このことをこそ問うてください。絶対に許してはならないことです。お願いします。

壊れてしまった信頼関係を回復することは非常に困難です。しかし、この困難を克服しない限り本当の平和を創り出して行くことは不可能だと思っています。

基地建設に繋がる作業の強行がなされないように厳しく対峙しながら、個々人を追い込まない方法を模索しています。どうぞ現場の思いを理解し、ご協力をよろしくお願いいたします。

◆神奈川教区基地・自衛隊問題小委員会は、「バルブ事件」に対して、下記のような緊急抗議及び要請文を那覇防衛施設局長に送付しました。

那覇防衛施設局　　2007年7月30日
局長　佐藤　勉 殿

日本基督教団神奈川教区社会委員会
基地・自衛隊問題小委員会
委員長：菊池　礼子

平良夏芽さんに対するバルブ閉栓事件に対する緊急抗議及び要請

去る7月21日午後１２時３０分頃、米軍普天間飛行場移設に伴う辺野古沖での環境現況調査で、機械設置の作業員に基地建設阻止行動をしているダイバー・平良夏芽さん（日本基督教団うふざと伝道所牧師）が、空気タンクの栓を閉められ、命の危険に晒されたことに対し、私たち日本基督教団神奈川教区社会委員会基地・自衛隊問題小委員会は、その事件に責任ある那覇防衛施設局に対して、強く抗議し、平良夏芽さんに対して謝罪することを求めます。

調査に反対するヘリ基地反対協議会の代表たちが、施設局に抗議と謝罪を求めて那覇防衛施設局を訪ねた２４日の時点で、施設局はSACO（日米特別行動委員会）合意による海上埋め立て案建設のボーリング調査では現場に配置させていた施設局職員の「監督官」を、今回の環境現況調査では置いていないことを認めました。また、それに引き続いて行われた施設局への抗議申し入れが行われた27日の時点での「暴力行為は無い」と認識しているとの施設局長代理の回答は納得いくものではありません。栓を閉められた本人が、「作業ダイバーがさわったとしか言えないのがはっきり言える事実であり、それを補完する資料として映像がある」と言っています。

また、これまで多くの怪我人を出し、どんな危険な状況が生じても、一切の責任を負わず、ノルマだけを業者に押し付ける施設局の無責任体制は、絶対に許すことは出来ず、糾弾せざるを得ません。

私たちは、このように命を軽視して行われる環境現況調査を直ちに中止することを要請します。また、この事件の事実確認することを要請します。

そして、基地建設につながる作業の強行がなされないことをここに強く要請します。